

短編集



参加コミュのお題で書いた作品。

第一弾 お題目「ビール」

俺はある日コインを拾った。

浅草橋を歩いている時、なにげに光る物に目がいき、いつの間にか手にしていた。
銀色に輝くそれは、見知らぬ外国人が描かれていた。

そんな日の夜。

また、怪しげな封書が届いた。

これで何通目だろうか...

最初に届いたのは、確か1ヶ月前ぐらいだった。

内容は、俺の親父が亡くなった。

遺言が遺されているので弁護士事務所まで来い。

みたいな感じだった。

そんな、新手の詐欺商法のような手紙を信用するはずもなく...

今日に至っている。

確かに、俺の親父は小学生時代に母と離婚して、今は何処に居るかも知らないし。

離婚してからは、一度も会っていない。

だからって今更、死んだ、遺言って...

何それ！

ふう～

ため息をついた時、ふと今日拾ったコインの事を思い出す。

ヨシッ、コインで決めよう。

人物が描かれた方が出たら、封書を確認し弁護士事務所へ赴く。

そうじゃなければ...

封書ごと棄てる。

ポケットにあったコインを取り出し、親指で弾く。

パチンと音をたて、空に舞う。

タイミングを見計らい、右手に掴みそのまま左手の甲にぴたりとあてる。

俺はゆっくりとそれを覗き込む...

人物...

台東区にある古びた弁護士事務所に赴くと、待ち兼ねたかのように、赤いフレーム眼鏡の女性が招き入れてくれる。

席につくなり書類一式をテーブルに拡げ、そつなく話し始める彼女。

「再三お宅様に連絡したのですが...きていただいて感謝します」

嫌味でも言われると思ったが感謝の言葉を述べられた。

「あっ、いやこちらこそすみません。新手の詐欺商法かと思っていたものですから」

「やはりそうですか...最近はそのような方が多いのです。嫌な時代になりました」

彼女はため息混じりに呟いた。

詐欺が横行している世の中だ、そういった意味では弁護士も多少の被害は受けているとみえる。

「それでは、はじめに身分証を拝見出来ますか？」

彼女は俺の免許証を確認すると「はい、結構です」と言い話しを続けた。

「貴方のお父様にお預かりしている遺言状といくつかの書類をお渡し致します」

中を確認すると、遺言状、預金通帳、印鑑、それと権利書らしき物が入っていた。

「見ても構いませんか」

俺は遺言状を手にして見せた。

「ええ、勿論」

中を見ると、始めから謝罪の言葉。

そして、僅かばかりの金銭と土地を譲り渡すといった内容だった。

そして最後にこう書かれていた。

できれば、お前の妹に会ってやってほしいと...

「なっ、何です。この妹って」

「はい、貴方のお父様は離婚後暫くして再婚なさいました。そして、お子さんが出来た。つまり、貴方の妹さんって事ですね。遺言にもありますように、一度だけでも妹さんにお会いになつては」

淡々と語る彼女に、どう自分の気持ちを伝えていいか解らず。

次の言葉が見つからない。

それを見兼ねてか、彼女が告げる。

「あの、お会いになられますか？なんでしたらこちらで手続き致しますが。チケットの手配とか...」

「チケット？あの、い、妹って今何処で暮らして居るのですか」

「あっはい、キューバです」

「.....」

言葉が詰まる。

キューバって何処？

あれから弁護士の奨めもあり、いろいろ考えてやはり妹に会うことにした。

数日後、弁護士から連絡があり妹に会える日が決まった。

そして、長い時間をかけ、ホセ・マルティ国際空港に着いたのは、真夏の炎天下な日だった。

俺と弁護士...

彼女は業務の一貫として同行してくれた。

だが、あからさまに観光気分が放たれている。

二人はタクシーを拾うと、ハバナからカリブ海に近い町へと向かった。

此処も日本と同じ島国なのに、別世界に思える。

暫くすると、港町に到着した。

車から降り立つと、そこは見るからに貧しい漁村に思えた。

人々は疎らで活気がない。

唯一海だけはスカイブルーで、暑さも手伝ってか直ぐさま飛び込みたい衝動に駆られる。

じっと海を眺めている俺に弁護士が声を掛ける。

振り向くと弁護士の傍らには、ラテン系の可愛いらしい少女が立って居た。

たぶん、あれが俺の初めて会う妹...

淡い小麦色の肌、髪は少し金髪がかったくせっ毛。

顔はやはり、親父に似ているのかな。

すらっとした身体にタンクトップにタンパン、健康そのものといった感じだ。

俺は彼女の許へ行き挨拶を交わす。

「えっと、日本語しか話せないけど...はじめまして」

「あっ、はい、大丈夫です。父から日本語は教わりましたから」

流暢な日本語で返された。

この娘が、たった一人の肉親...

いきなりの兄妹、何か不思議な感じだ。

一通り挨拶が終わると、親父が暮らしたという家へと招かれた。

中は、どこか日本風で懐かしい気持ちになる。

リビングに落ち着くと、彼女はアルバムを見せてくれた。

その中に葉巻を燻らす親父が居た。

「あの、親父って葉巻を吸ってたのかな？」

「えっ、はい。何時も家に戻ると葉巻を吸っていました」

此処には、俺の知らない親父が居たんだな...

「そう。それで、親父はどんな仕事をしてたんです」

「カメラマンです。記者も兼ねてですけど...ですから、家にはほとんどいませんでした。でも、

帰ってくれば優しい父でした」
彼女にとっては、よき父だったらしい。
俺にとっても、優しい親父だった気がする。
しかし、カメラマンだったとは...

俺の妹は、親父の思い出話を延々と語ってくれた。

最後に俺は、親父の墓参りをしたいと告げると、妹はキッチンへ行き紙袋と花束を抱えて現れた。

「日本人のお兄さんの事だから、そう言うと思ってお供え物？って言うんですか。用意していました」

気の使いようが、日本人の血なのかな。

「ありがとう」

案内されたのは、敷地内にある質素な墓地。十字架が二つ仲良く並んでいた。

「一つは君のお母さんかな？」

「はい。左がそうです」

俺は、彼女の母の墓標に手を合わせる。

そして、親父の墓標に手を合わせようとした時...

後ろで、プシュッと音がした。

「あの、これ。父が好きだったビールです。それと葉巻...」

気まずそうに、二本の冷えたビールと葉巻を渡された。

俺はそれを見て何だか嬉しくて堪らなかった...

目頭から熱いものが零れ落ちる。

この時俺は決めた。

「ねえ、日本に来る気ある？」

それを聞いた彼女は、戸惑いながらこう告げた。

「コインあります」

俺は何も考えず、手に持っていたビールを親父の墓前に供えると、ポケットにあったあのコインを妹に渡した。

「あっ、チェ・ゲバラのコイン。こっちが表。そして裏。表が出たらお兄さんと一緒」

そう、此処へ来て初めて気づいたが、あのコインはキューバのコインで、革命家チェ・ゲバラが描かれたものだった

妹は、チェ・ゲバラの描かれた方を表だと言ってからパチンと弾いた。

俺がしたように...

そして、にこりと笑い、左手に乗ったコインを見せてくれた。

表...

「お兄さん、葉巻とビール。味わって」

妹はそう言った。

言われるまま、葉巻に火を点け燻らす。

そして、ブカネ口と書かれたビールを親父に向け「乾杯」と呷き一口のんだ。

ベストマッチかな、旨いよ...

生きているうちに、一緒に飲みたかった...

皮肉なもんで、今更そんな事を思う。

けれど、親父。

俺は今カメラマンを目指している。

そして、あんたの子。

俺の妹はコインで人生を決めた。

間違いなく...

俺らは家族だ。

あらためて、乾杯。

離れた所で、羨ましそうに弁護士がこちらを見て居た。

妹に頼み、ブカネ口を彼女にも渡してもらおう。

出合いに乾杯...

.0

参加コミュのお題で書いた作品。

第二弾 お題目「花火」

日本に帰国したのはほんの数時間前。

なのに、既に依頼のメール...

添付ファイルに女性の写真...

もうこれで最後にしたい...

彼女にあったのは、2日後。

俺は何もないビルの屋上。

彼女は厳重な警護が整ったホテルの一室だった。

ほんの数秒間、窓際に立った彼女は笑っていた。

いや、泣いていたのかも知れない。

殺人現場を目撃しただけの彼女は、2日前死の宣告をされた。その殺人犯から...

一方的に不条理な死を向けられた。

そして、その不条理な死をもたらすのがこの俺...

期限は、彼女が法定で証言する5日後まで...

俺は、逃走経路を確認する為下町の細い路地を歩いていた。
ふと、左側を見ると駄菓子屋が目に映り懐かしさのあまり足を止めた。

夏休みとあってか、子供達が蟻のように玩具やお菓子を群がって居る。
その一面に色鮮やかな夏の風物詩が、所狭しとばかりに並べられていた。

俺はその一つを手にしようとした。
その時、目の前にターゲットである彼女が現れた。

しまった。
まさか、こんな所に彼女が現れようとは予想外だ。
SPも何故外出を許す。

しかし、SPは二人。
此処でやろうと思えばやれる...
どうする。

考えを巡らすなか、彼女は申し訳なさそうな顔を俺に向ける。
取ろうとした商品を一足先に彼女が手にしたからだろう。
だが彼女は言葉にする事なく、手を使って何かを仕切りに表現しようとしていた。
手話！

「ごめんなさい。懐かしさのあまり、つい手に取ってしまったもので...」
そう、表現していた。
彼女のその表情と仕草を見た刹那...
俺の記憶の中にあるその表情に思い当たるものがある事に気が付いた。

十数年前、夏休みを利用し秋田の親戚に泊まりに行った際出会った彼女。
8歳の俺は、ほんの少し年上の彼女を見るなり驚いた。

真っ黒に日焼けした俺とは対比的に、透き通る程の白い肌に...
その頃は確か言葉を話せていた。

8歳のガキの俺は、出会った彼女に驚いた事などどこ吹く風。
何も考える事なく田舎を満喫していた。
何処までも透明な川で泳ぎ、広大な山々を駆け回っていた。

汗だくになった俺を、彼女は夕方早めの風呂に入れてくれた。
狭い田舎の湯船にお互い浸かる。
彼女の少し膨らんだ胸...その真ん中に生々しい傷があった事を思い出す。

そして、風呂で言った悲しい一言も...
「私の事、忘れないでね」
複雑な表情で言った彼女の顔。

後で聞かされたが、彼女は病気がちで何時死んでもおかしくない...
その彼女は一部の感覚を失いはしたが死を免れ目の前に居る。

俺のターゲットとして。
そんな彼女に死神の如く近づく俺はいったい...

彼女も俺に気付いたのか、まばゆい眼差しをこちらに向け「私の事覚えている」そう、伝えてきた。

「覚えています...」
俺は在り来りなかえしで、ほんの少し彼女と立ち話をしてから、最後にメルアドを交換し別れを告げた。

その日のうちに、彼女にメールした。
俺の心情...そして、裏切りの内容。
幼い頃の俺を知る彼女が、メールの内容を信じてくれるか複雑な思いだった。
だが、信じてくれる事を願い。

そして、ここ数日で得た彼女の行動パターンを解析した。
その結果ベストだと思えるのが今日の14時。
法定に赴くほんの僅かな時間。

手には一発の銃弾...これに全てがかかっている。
特殊な先端、火薬の量。最高の技術で作り上げた。

ロビーから出た彼女はSPに囲まれたまま、用意された車へと歩みを進める。

スコープの照準にあわされた彼女の表情は重苦しいものに思えた。
しかし、俺はプロに徹するしかなかった。
前以て仕掛けて置いた、リモートスイッチを押す...

パパパパン

彼女の左前方で乾いた音の爆竹が炸裂する。
その陽動にSPがまんまと引っ掛かり、左前方に体制を移す。
そして、彼女と俺の間にストレートな空間を作り出す。

パンッ

乾いた音と共に、彼女の胸元が赤く染まる...

ゆっくり崩れ落ちる彼女...
それを確認すると、急ぎ後始末をする為その場を後にする。

遠くから、けたたましいサイレンが響きわたる...間に合ったな。

秋田の過疎化した田舎でも、お盆ともなれば若者や子供達の歓声が大自然にコダマする。

「爺ちゃん、婆ちゃん！花火しよ」
縁側に座った老夫婦に、真っ黒に日焼けした男の子と女の子が駆け寄る。
「まあだ早い、暗くなってからな」
子供を諭すように老人が言った。
子供達はブーイングの嵐とかし庭を駆け回る。
それを見た老女は、老人の肩を叩き...
手話で「爆竹」と伝え微笑む...

あの時使った爆竹。
今は孫達と...

パパパンッと田舎の山河に軽快な音が響き、子供達の歓声が沸き上がる！

老女は、手話で「来年も覚えていてね」と老人に伝えた。
老人は「もちろん」とうなずいた。

参加コミュのお題で書いた作品。

第三弾 お題目「靴」

丘の上にあるこの教会で幾度祈った事だろうか。
しかし、我が神は願いを叶えてくれそうにないようだ。
これが所謂、神が与えた試練ってやつなのだろうか...
ったく、神様って奴は...

教会を出ると生まれ育った町並みが眼下に飛び込んで来る。
幼い頃に見た景観は都市と自然が融合し誇りにさえ思えた。
だが今は煙と埃に塗れ瓦礫と化した街が熱い陽射しに揺れている。

悪政に虐げられたこの街。
何度も偉いさんの頭をすげ替えた...
しかし、それだけ。
変革はみられなかった。
だからこそ我々が立ち上がった。
変革をもたらす為。
悪政の中心に居るアイツと対峙する為。

僕らは銃火器を携え、通称【都市の洞窟】を目的地に向け歩を進めていた。
一般人が立ち入らない地下には縦横無尽にトンネルが掘られている。
まるで迷路...嫌、シェルターのようだ。
そして、僕らが目差しているのは本物のシェルター。
見つけた時は驚いた。
この都市に本物のシェルターがあったとは...
しかも、市民は誰も知らない。知らされていないのが現状か。
知っているのは一部の要人のみ...実際に戦争が起きてそこを使用出来るのもその要人だ。

捜し出すのに2年。開閉暗号キーを解読するのに半年を費やした。

そして今夜が決行の日だ。
どぶねずみのように地下道をはいずり回りずぶ濡れでやっと目的地にたどり着く。
湾曲した通路が終わり、大きな壁が我々を拒むかのように立ちはだかる。
そこには【Shellfish】と書かれていた。
その壁の右隅に不自然なテンキーモニターが埋め込まれている。
暗証番号とカード認証の二重ロック。

「リーダー。任せなあって、こんなの猫の子ニャンニャンだから」
僕をリーダーと呼ぶ男はグループの中では最年少の陸。
クラッカーとしては右に出る者はいない。
だが、一般常識が少しズレている。

「それを言うならお茶の子さいさいな。全然あってないだろが...」
呆れる態度で言ったつもりだが陸は気にも留めず。
「男は細かい事は気にしない」ニコッと笑い。
端末機とカードキーを使い難無く扉を開けた。

その瞬間眼前にループ状の通路が広がる。
突き当たりには円筒形の扉。
アイツが居るシェルターだ。
此処まで来るのに硝煙と鉄錆の匂いを何度嗅いだ事か。

「リーダー！」

「ああ、頼む」

陸に扉の開閉を指示し、控えて居た仲間に奴の側近を連れて来るよう合図する。

捕虜にされた側近の男はアイマスクをされ怯えた様子で近づく。

僕は手にしていた拳銃を男のこめかみにすっと当てた。

引金に力を込め「右手を出してもらおうか」そう言って男の手錠を外させ、手首を掴み扉横にある液晶パネルに掌を無理矢理押し付ける。

ピッ

音と共に赤く染まっていたパネルが緑へと変化した。

この男の静脈認証はいきていた。

「陸。どうだ」これで全て開閉出来るか尋ねる。

「ええ、おっけす。開けます」

プシューとエアーが抜け円筒状の扉が奥に擦れ、60センチ程動いた所で左にスライドした。

完全に開ききると中の様子を伺いながら、捕虜の手錠を嵌め直し先頭を歩かせシェルター内部に侵入した。

中は体育館程の広さがあった。

周囲の壁には無数の扉がある。

だが、僕らが目指すのは正面中央にある奥の扉。

「さあ、行くぞ」

僕が仲間に声を掛けると「おう」と周囲が応える。

歩みを進め始めた時。

タタタタッ

と機関銃の乾いた音。

先頭に居た男は血飛沫を散らし崩れ落ちた。

残った護衛が最後の悪足掻きとばかりに、数少ない武器で抵抗を試みるも。

我々の方は小数精鋭の部隊と言ってもいい。

即座に敵を鎮圧する。

そしてたどり着いた最後の扉。

「みんな。悪いがここは僕に任せてくれないか」
事情を知っている仲間達は静かに頷く。
ありがとう。と僕はみんなに礼を言ってから、最後の扉を開いた。

手に拳銃を強く握りしめ中へと入る。
そこには鏡を想わせる光景...
僕に瓜二つの男がこちらを見ていた。

「久しぶりだな、卓。数年会わない間に頼もしくなったものだ」
ゆったりとした口調で話し始める彼はどこか冷めた表情をしていた。
「どうした。言葉も出ないか」
彼は座って居たソファからゆっくりと立ち上がりこちらを見据える。
手には小銃。

「兄さん。どうしてこうなったか理由は知らない。けれど、僕はレジスタンスのリーダーとして
貴方を許す訳にはいかない」
やっと対峙する事が出来た唯一の肉親の兄に僕は銃を向ける。
「そうか、今更俺の事を聞いても仕方ないか...それもそうだな。聞いたところで生き様が変わる
事もなければ、お前の気持ちが変わるはずもないだろうからな」
「兄さん...」
僕は言葉を失った。何故こんな事に...

「卓、気にするな。お前のせいじゃない。統べて俺が蒔いた種だ。責任は俺にある...だから、前
を向け...そろそろ始めるぞ」
兄は言い終えると、僕に小銃を向けた。

「止めて、兄さん」
僕は反射的に銃を構え引き金を弾いた。

パパン...

あれから、数日。
右肩の傷も多少癒えた。
けれど、心の傷は癒える事はないだろう。
僕は何時もの教会を訪れ懺悔した。

全て終わった。

教会を後にしようとした時、牧師が近付いて来て
「これを、お受け取り下さい」
そう言って手渡してくれたのは...一足のトレッキングシューズ。

「これは、誰から」
「貴方のお兄様からです。すまなかったと一言添えてくれともおっしゃっていました」

...僕がこの教会を訪れて居た事を兄は知っていた。
そして、あの言葉の意味「前を向け」
今更気付く。

僕がこの街を出る事も知っていたのだろうか...
双子の兄。同じ顔。この街にはもう...

兄に貰った靴にはきかえ、愛するこの街を僕は後にする。

振り向く事なく...
前を向いて。